

## パース「新しいカテゴリー表について」における

### 二つの存在論的要請

安永光希（東京大学）

#### 発表要旨

本発表は、アメリカの哲学者チャールズ・サンダース・パース（1839-1914）の論文「新しいカテゴリー表について」（1867、以下 NLC）を扱う。当論文は、変遷の激しいパース哲学の中でも最初期に書かれた論文であるが、生涯通底して取り組まれた記号論やカテゴリー（一次性、二次性、三次性）の萌芽を多分に含んでいる。とくに NLC においては、記号をめぐる思索をパースに動機づけた、哲学的な問題設定が顕になっていると言えよう。

NLC では、アリストテレス以来哲学の問題になり続けてきた「カテゴリー」、すなわち私たちの思考や世界を規定する枠組みが、パースの手によって再提示される。カントの『純粋理性批判』、特に「超越論的分析論」の熱心な読者であったパースは、カントに従い、カテゴリーを認識論的なものとして導出している。つまり NLC のカテゴリーは第一に、私たちが対象を認識する際に用いる、思考の普遍的な枠組みである。NLC のパースは、私たちが「A は B である」と述定する際、普遍的に（常に既に）使用している概念作用（＝カテゴリー）を、「抽析（prescision）」と呼ばれる基準を用いながら、導出した。最終的にパースが提示するカテゴリーは、「存在」「質」「関係」「表象」「実体」の計五つである。

本発表の目的は、これらの認識論的なカテゴリーが有する存在論的な要請を検討することである。上述のとおり NLC では、述定の条件として五つの普遍的な概念作用が取り出されるが、これらの条件は、いかなる世界の構造によって可能になっているとパースは考えていたのだろうか。本発表では、NLC における諸カテゴリーの基本的な特性を述べ、それらのカテゴリーが持つ存在論的な射程を考察する。この考察により、パースとカントを隔てる差異、およびパースが記号の問題へと関心を向けた哲学的背景が、いくばくか明らかになるはずである。

#### 参考文献

- Peirce, C. S. 1982-2009. *Writings of Charles S. Peirce: A Chronological Editions*, 7 vols. Edited by E. Moore, C. J. W. Kloesel et al. Bloomington: Indiana University Press.
- Ishida, M. 2009. “A Philosophical Commentary on C. S. Peirce’s “On a New List of Categories”:  
Exhibiting Logical Structure and Abiding Relevance.” Doctorial dissertation.
- Kant, Immanuel. 1998. *Kritik der reinen Vernunft*. Hamburg: Felix Meiner Verlag.